

強靱な組織づくりを考える



巻頭言

金田 安史*

What is a tough faculty?

Key Words : diversity, flexibility, integration

大阪大学医学部が帝国大学として設立されたのは1931年ですが、その源流は1838年に緒方洪庵によって大阪の地に開かれた適塾にあるのはご存じのことと思います。洪庵は医師として患者を診る一方、門をたたいた全国の若者を塾生として医学・蘭学を教えていたといわれていますが、司馬遼太郎の著書などには、塾頭を決めて、塾生との間で活発な議論をさせていたように書かれています。その門下からは慶応大学の創始者である福澤諭吉、近代陸軍の祖である大村益次郎、日本赤十字を創始した佐野常民、公衆衛生学の基礎を築いた長与専斎など様々な分野で偉大な業績を残した多くの俊才が輩出されました。洪庵の作った自由闊達な環境がそれを生んだと思われれます。

私もよく似た経験を研究者として積んできたと感じています。私は1980年に阪大医学部を卒業して内科の大学院に入学しましたが、1981年から当時阪大微研におられた岡田善雄博士のもとで研究をすることになり、岡田先生が退官される1991年まで門下生として研究に従事してきました。岡田研究室の環境が、適塾の環境に似ていたのではないかと想像しています。詳細は書ききれませんが、その教を請うた仲間の中から、核機能、細胞質の膜形成、細胞膜受容体、ゲノム修復、心血管系の発生などの分野の担い手が輩出されたことに加え、私のように遺伝子治療学の分野に従事する者も現われました。

私も1998年に大阪大学医学部の遺伝子治療学の教授になったときに、ベクター開発の研究者や遺伝子治療の応用に興味のある臨床家ばかりでなく、エピジェネティックスの研究者も加えました。15年を経た現在、それらがうまく融合してきて成果が出てきている手ごたえを感じていますが、当時は異分野の研究者が1つの講座に同居して遺伝子治療学という同じ分野の研究を進めているというのは非常に奇異に映ったに違いありませんし、研究室の中も穏やかではありませんでしたが、これこそ私が望んだ環境だったと自信を持って断言できます。日本人は概して、均一なものを好み、同じサークルを作ろうとし、異なる考えを持つ人を排除する傾向が強いと思います。それは一見和気藹々で楽しそうですが、個性が弱くなり1人1人が輝くことは望みません。様々な圧力には耐えられない脆い組織です。

大阪大学医学部医学科は現在約60の講座があり、それぞれの教授が異なる分野の専門家であり国内外での権威であるわけです。しかしどの講座も、ヒトの生命現象の仕組みを解明し、難病の診断や予防・治療に資する活動を行っているわけで、そういう観点からは究極的な目的は同じなのです。部局の中で喧々諤々の議論があってもいいのですが、大局的な視点に立って講座の枠を超えて柔軟に一体化できる組織こそ強靱であり、研究科長の手腕は実にそこにこそ生かされねばならないと感じています。大阪大学医学系研究科・医学部の偉大な先人達は、もちろんそのことを意識しながらうまく意見をまとめていつも国内外に先駆けた斬新なアイデアを出し続けてきました。それによって大阪大学医学系研究科・医学部は世界の医学界をリードできるようなステータスを維持できてきたのだと思います。その精神を継承し、後世にも実績を持って伝えることが私の使命です。



* Yasufumi KANEDA

1954年5月生
大阪大学 医学部 (1980年)
現在、大阪大学大学院医学系研究科 遺伝子治療学分野 教授 医学博士 遺伝子治療学
TEL : 06-6879-3901
FAX : 06-6879-3909
E-mail : kaneday@gts.med.osaka-u.ac.jp